



おちのまんぢら

月雲

鷹玉章

二編

伊東專三編輯

櫻齋房種画

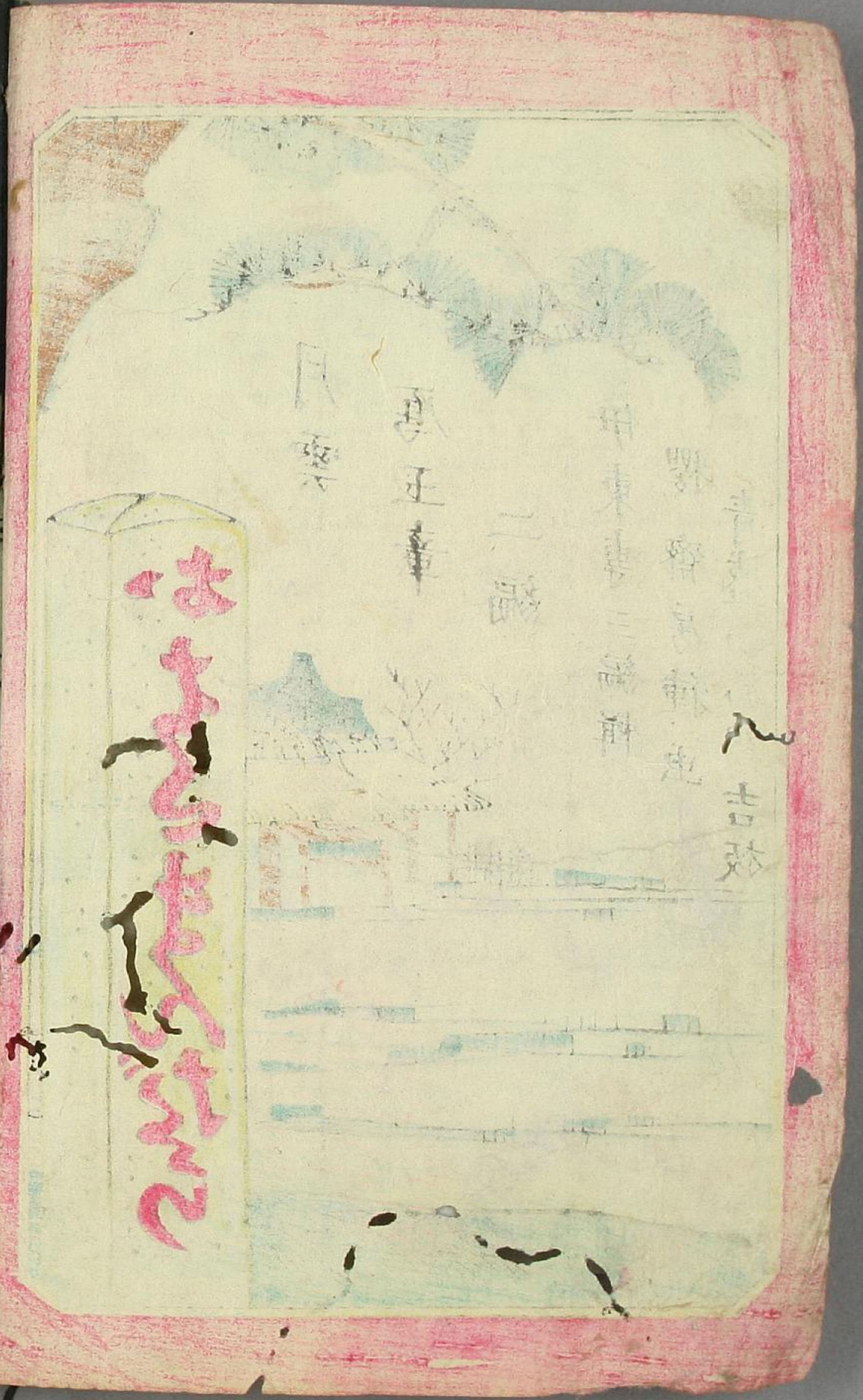
青盛堂加賀吉板





伊東專三編輯

加賀吉版
二編上



伊東專三編輯

月夜

真正

二編

伊東專三編輯

加賀吉版

吉版

A555
2

月り雲

尾結玉孝

伊東橋塘

作

接多一頁終
画

二編上

板



月雲鴈五章第二編序

電信の空中と駈りて瞬間の音信と通。汽路の鐵道を走りて須臾の數里に達す疾が勝。世の中合巻のまゝ時世の連を初編と出せ別續して二編三編結局の中間をく出さしむ看客方が飽て後之を見ざるは況て吾侪が著を如き愚作の草紙に最も然れば。只か早の如景物と机に向ふ急案の硯の鐵路小墨の汽車。紙上の空中に筆を駈せ草稿のせだ次輯を終梓小登する事と云たりぬ

明治十五年春

おの奉作者

伊東橋塘誌



鳥三章二七

<48-8339>

関口重三郎



暎家阿金

後人ふ知

よつこきよりハ
すこよるる

佐藤治政



貫川の當依

古今

屋守さとのもの
さしこるるをあま

平中五郎

関口の娘阿勝



折よ月形と
物りろく

あしやろ

西三

河原源藏

月雲一五章二編

東京 伊東橋塘著



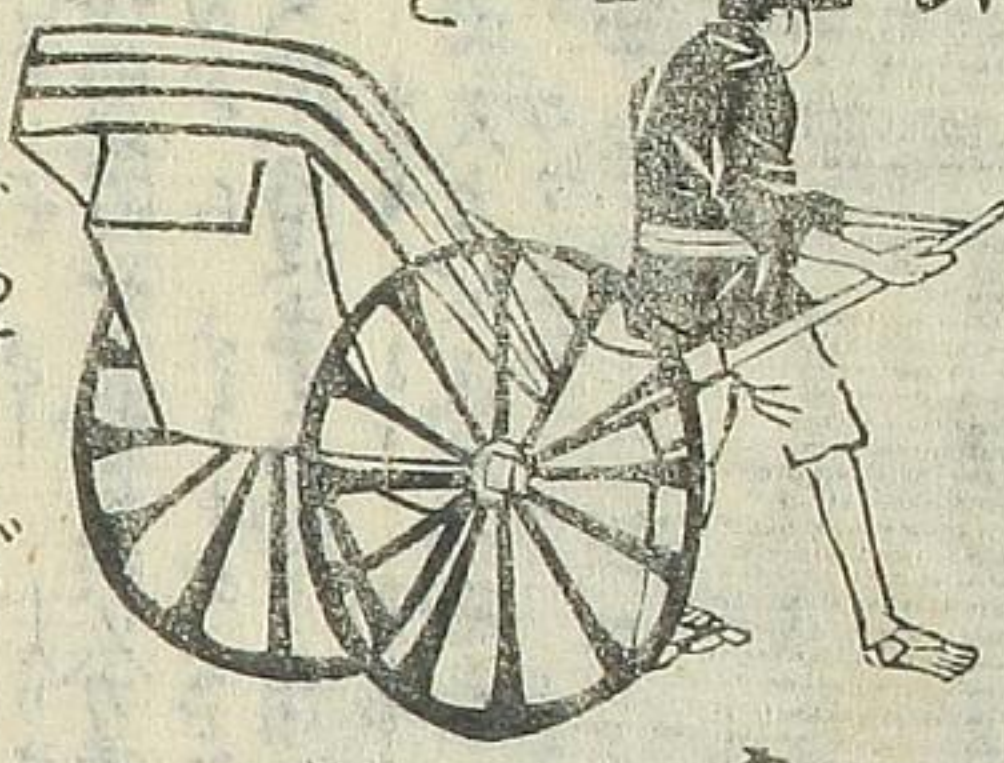
よ ちかくき 夜ハ海と交つらう 燈末途終
柳橋の橋と軋らぬ人か車ハ
蔓陀羅の曲り角

で人かど止める母衣
押除中より物二人の男女是列

ち別人より伍後家とお道より
その時すか懐中より何程う後と取込
返し「かきさん定世」窮屈をてあり
細己の西原源藏と云ふものいけ横町お獨り
あゝね
妻子も
あゝね

の別 庄お

① 水がれど相談事と極
 能の場而といひつ町と
 打笑ひ
 け方へ
 来ませ
 と心せ
 と心せ
 知る



まもつたはれは角と
 ひと町なる彼方小
 軒端傾き寝るる
 寂寂るし次は居あり

② 打てふ内はの極
 善しては洋焼行ふ
 源流の行ふ小服と
 先づ方とさまふ
 へ上へあがりてさるる
 清人あり人月の園の
 二階くとせり
 止肯一かたと連

③ 打てふ内はの極
 善しては洋焼行ふ
 源流の行ふ小服と
 先づ方とさまふ
 へ上へあがりてさるる
 清人あり人月の園の
 二階くとせり
 止肯一かたと連

④ 棒の通ふ
 自問自答を
 知一挨拶さへ
 そとく小欠柄は
 吹起(吹起)吹起
 袋の通ふの二階切
 由て通ふる
 どのの放積いれ
 おも二階と上りね
 二階くとせり
 止肯一かたと連



是ぞ河原の家あり

て後階子とす

二階と
 止肯一かたと連

① 未幾と強情をねがひて三年二月も
 ② 夫婿の老の聲を
 ③ 始末を知りし娘の事
 ④ 取手おぼしと二通の
 ⑤ 取手おぼしと二通の
 ⑥ 取手おぼしと二通の

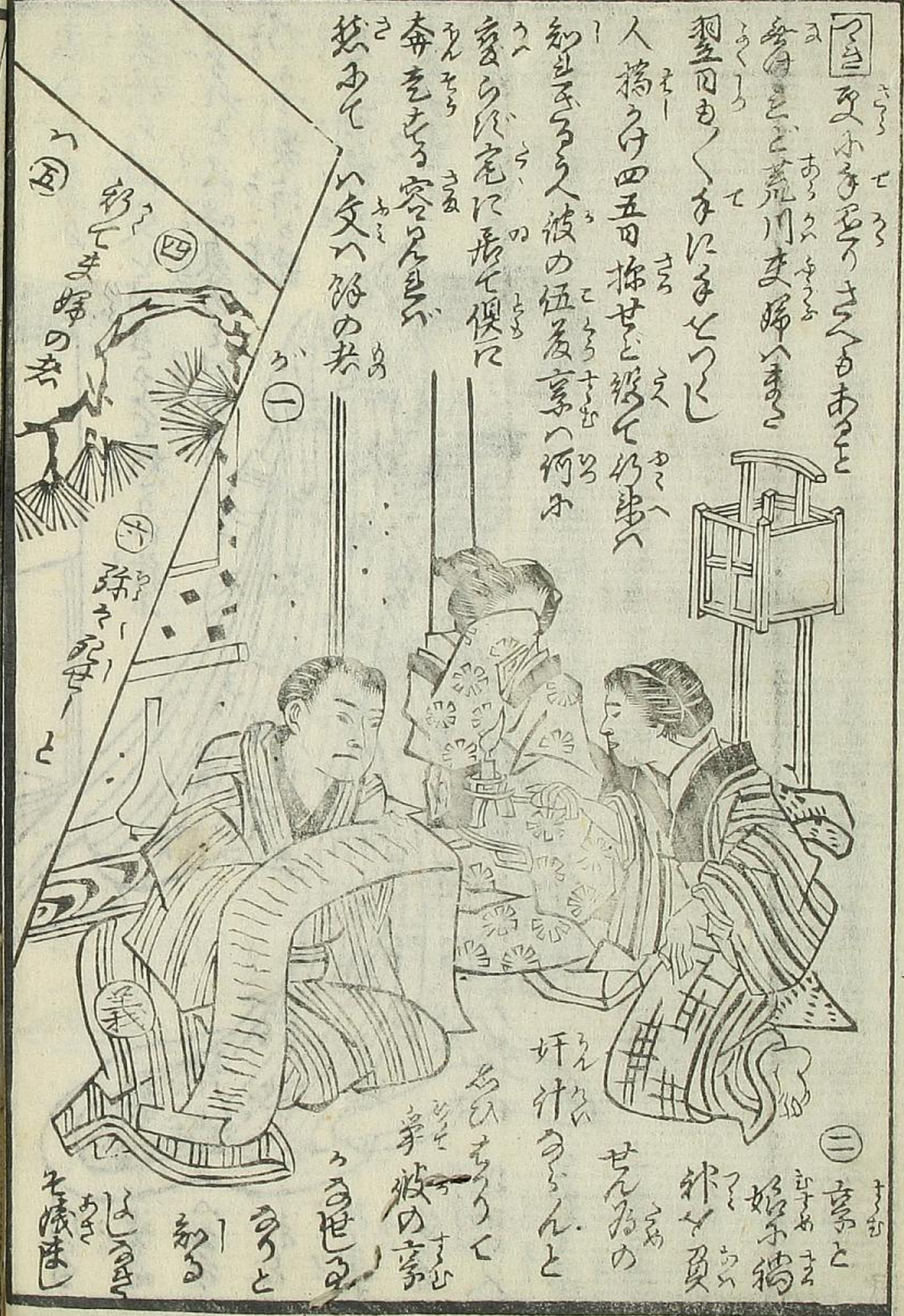
甘あけあひまゝ
 ① 次四郎と云ふ
 ② 夫婿の老の聲を
 ③ 始末を知りし娘の事
 ④ 取手おぼしと二通の
 ⑤ 取手おぼしと二通の
 ⑥ 取手おぼしと二通の



妻の心を
 ① 夫婿の老の聲を
 ② 始末を知りし娘の事
 ③ 取手おぼしと二通の
 ④ 取手おぼしと二通の
 ⑤ 取手おぼしと二通の
 ⑥ 取手おぼしと二通の



つぎ 又小舟をりてさへもあま
 舟をりて荒川を渡りて
 翌日もくくをいそいで
 人荷の舟四五日押せと彼を舟
 知れざる人彼の伍長亭へ河
 うらみは宅に居て僕に
 奔走する客をい
 然あてい文の路の若



① 義
 ② 高と
 ③ 好子
 ④ 好子
 ⑤ 好子
 ⑥ 好子
 ⑦ 好子
 ⑧ 好子
 ⑨ 好子
 ⑩ 好子
 ⑪ 好子
 ⑫ 好子
 ⑬ 好子
 ⑭ 好子
 ⑮ 好子
 ⑯ 好子
 ⑰ 好子
 ⑱ 好子
 ⑲ 好子
 ⑳ 好子
 ㉑ 好子
 ㉒ 好子
 ㉓ 好子
 ㉔ 好子
 ㉕ 好子
 ㉖ 好子
 ㉗ 好子
 ㉘ 好子
 ㉙ 好子
 ㉚ 好子
 ㉛ 好子
 ㉜ 好子
 ㉝ 好子
 ㉞ 好子
 ㉟ 好子
 ㊱ 好子
 ㊲ 好子
 ㊳ 好子
 ㊴ 好子
 ㊵ 好子
 ㊶ 好子
 ㊷ 好子
 ㊸ 好子
 ㊹ 好子
 ㊺ 好子
 ㊻ 好子
 ㊼ 好子
 ㊽ 好子
 ㊾ 好子
 ㊿ 好子



① 執行
 ② 祝戚中より老女
 ③ 一人の者もあらず
 ④ 赤き髪は法師
 ⑤ 姉あまのちが昔提と
 ⑥ 弟ひゆきせんといふ
 ⑦ 娘の初七日の速夜
 ⑧ 三月十六日の初まご
 ⑨ 甲州身延山(出
 ⑩ 足匠の石花老提
 ⑪ 橋白き荒川を渡りて
 ⑫ 今に不ふの果なきありぬ
 ⑬ 画換のつく
 ⑭ 今に不ふの果なきありぬ
 ⑮ 今に不ふの果なきありぬ
 ⑯ 今に不ふの果なきありぬ
 ⑰ 今に不ふの果なきありぬ
 ⑱ 今に不ふの果なきありぬ
 ⑲ 今に不ふの果なきありぬ
 ⑳ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉑ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉒ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉓ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉔ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉕ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉖ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉗ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉘ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉙ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉚ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉛ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉜ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉝ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉞ 今に不ふの果なきありぬ
 ㉟ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊱ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊲ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊳ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊴ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊵ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊶ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊷ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊸ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊹ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊺ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊻ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊼ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊽ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊾ 今に不ふの果なきありぬ
 ㊿ 今に不ふの果なきありぬ



多く僕へ是う根岸(はねがし)の徳又
 末らん(すえ)く(お)と(お)の(お)

四 五
 六 七
 八 九
 十



三 四 五 六 七 八 九 十
 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十

鳥下草上

七

中しませう必らぬ若方きまますと云ふは流し小
 ちうも油のりまねと流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 却て後の毎疾く言が事りて挑めども又小受入る言定い
 るに果の流花と二人して橋け月持も流繩りておとちと
 降り二階の欄小欄と結びつけ云といふは何日て日
 新しん産と流及の欄目
 而して案の産の中ハ
 素知かぬ新し根
 岸小流り流川主婦とりあさかにかさきあれども
 在事いゆもかた小知かす子て小刀計の麦折盤
 かなん幸若小舟舟も獲りてく死るんとする様
 中て二階小有るも己お七日我あ様ハ



二 淵川一より身
 と投下死ねま
 却て揚りめと
 覚悟と
 中く
 悲に
 容
 何更
 何更
 何更

死せと
 あひ佛事と乃ひ返出
 登道一りりさる
 比るく身の内末と
 考(ん)色い死ると
 考てあさり文い今文仇りゆくよ
 け家と流花と流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 五月も六日も長りしと云ふ流花の流し油も
 解のりりも有は流花と云く流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり



流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり
 流し油もきくは夜のけ家小流あつせり



玉 月
鳳 章

二編中



月より

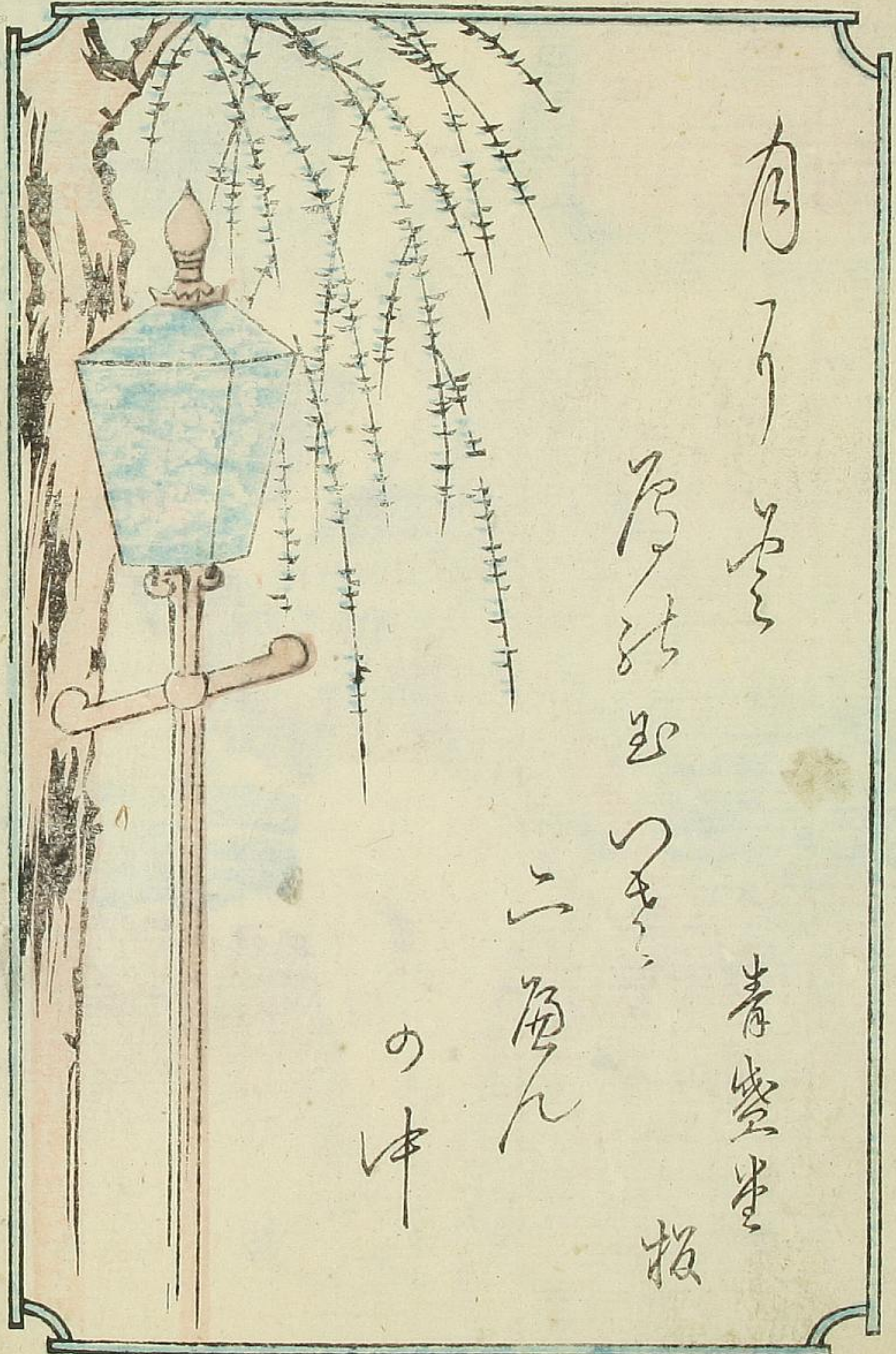
乃結玉

春盛生

板

二層ん

の沖



上つて即ち巡査の
角枕ありは折敷と

中のやの方(は)は

ほ下町汁(は)あ
中(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ
ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

免角(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

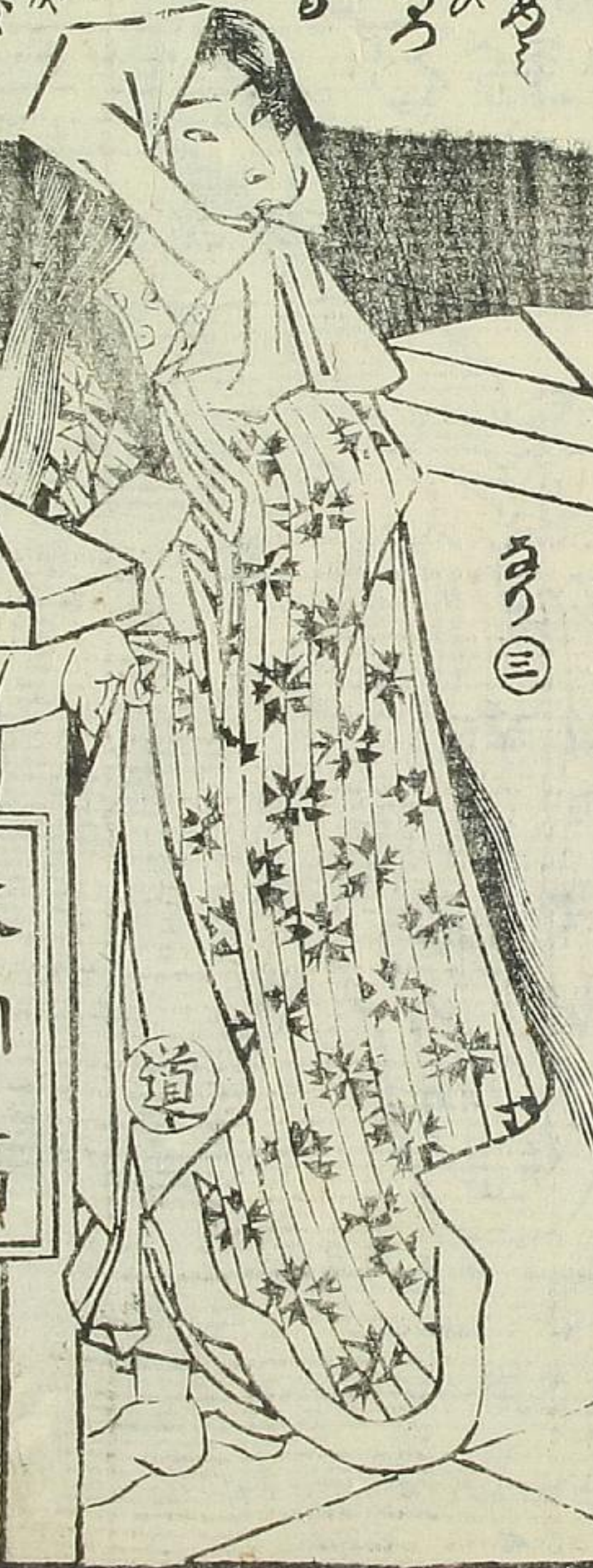
ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

三 樹巷と鳴るは新地
耳(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ
二河が波(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

三



大川橋

道

四

おたけ

おたけ

ほ下町汁(は)あ(は)あ(は)あ(は)あ

⑤ 南窓の櫓
④ 南窓の櫓
③ 南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

④ 南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

⑤ 南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓



① 南窓の櫓
② 南窓の櫓
③ 南窓の櫓
④ 南窓の櫓
⑤ 南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

① 南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

② 南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

③ 南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

④ 南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

⑤ 南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

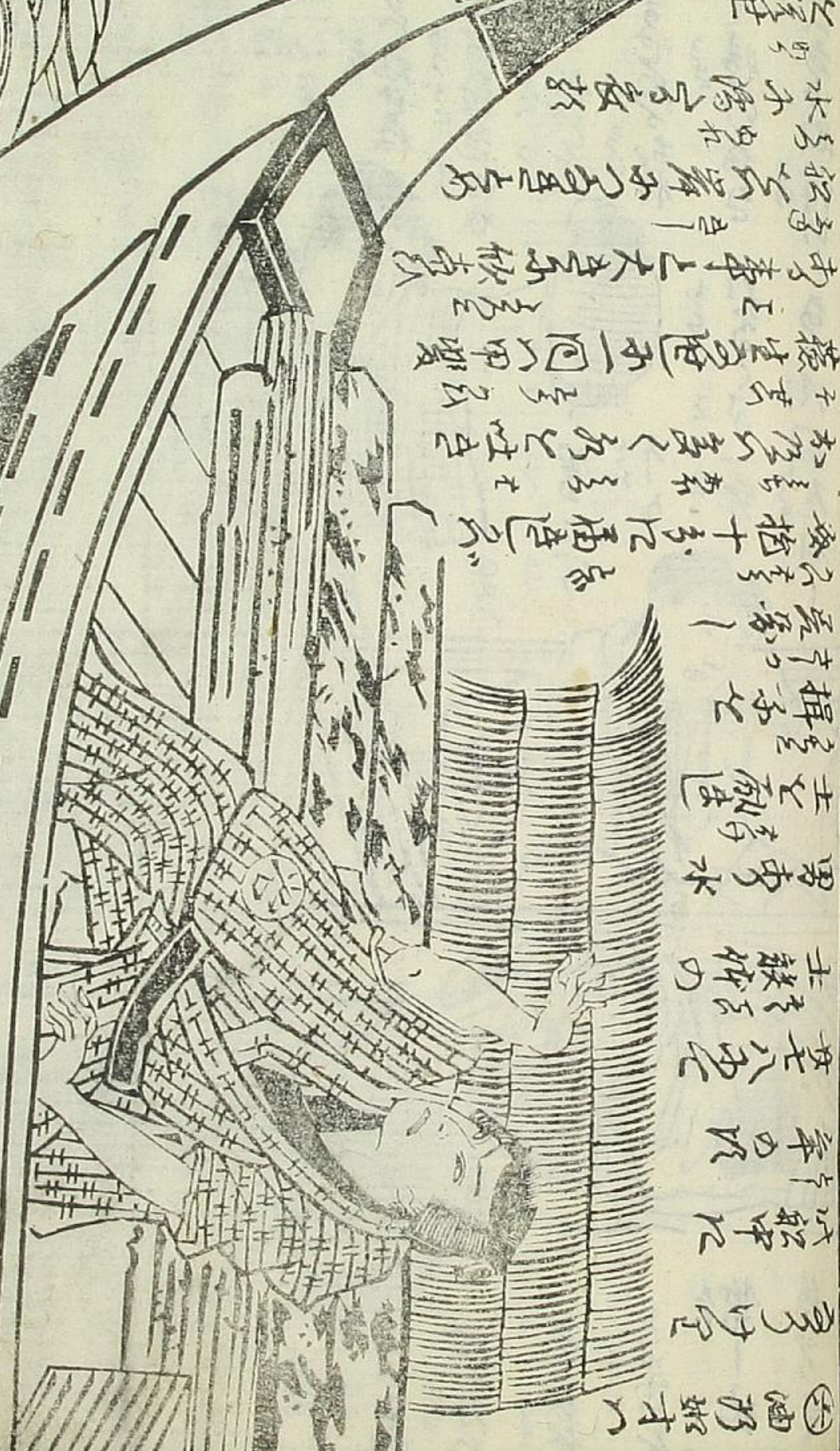
南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

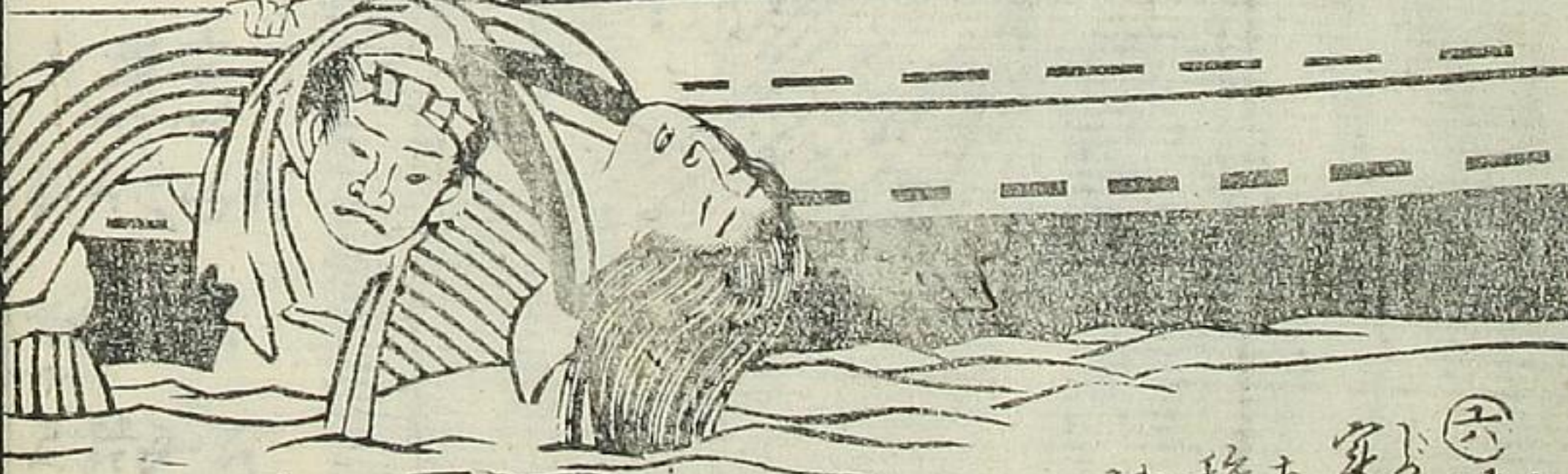
南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓

南窓の櫓
南窓の櫓
南窓の櫓



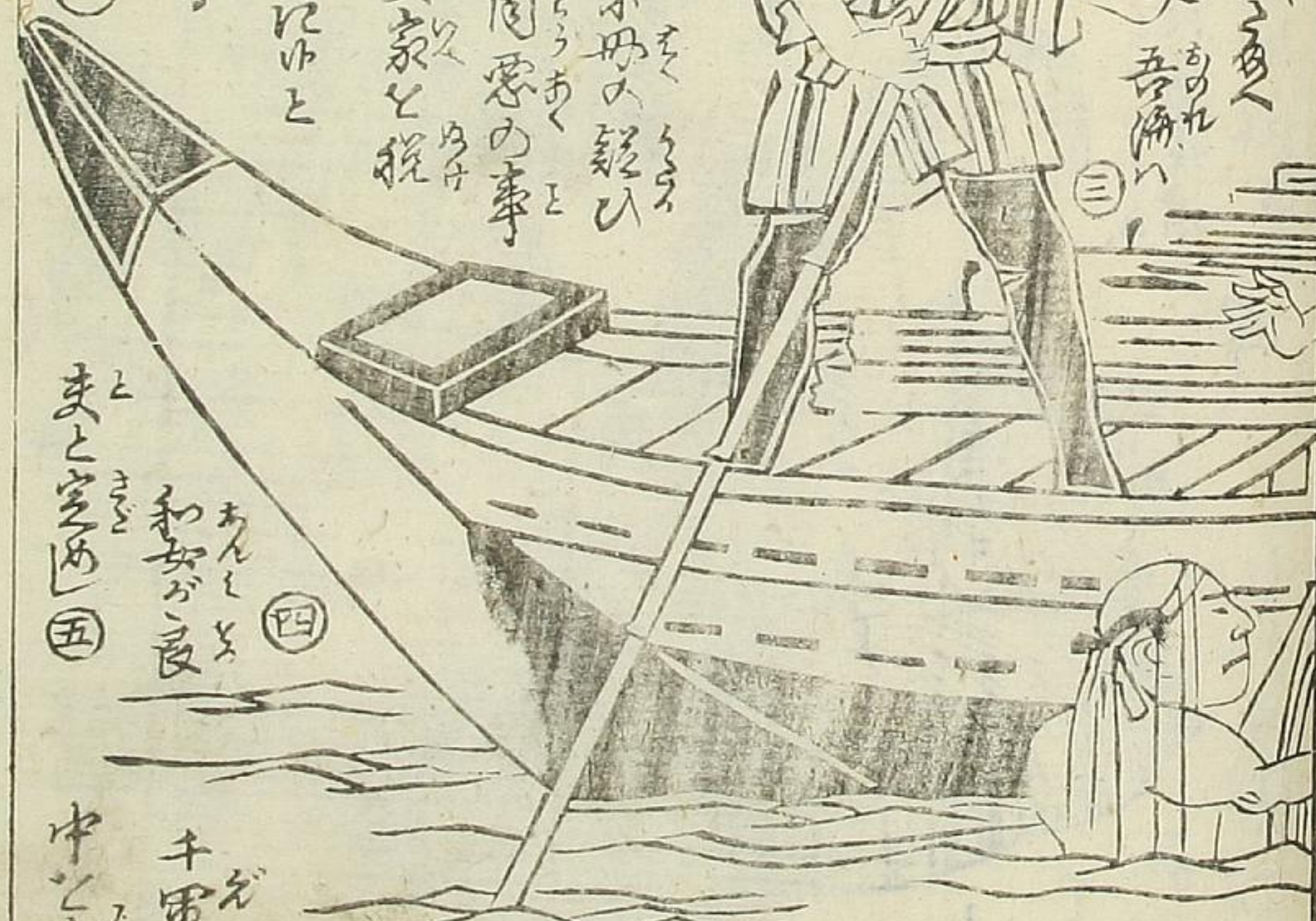
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200

風俗の申すに... 世に世に... 世に世に...



六 佐後... 実の足... 村の佐後... 治政... 普一... 孫... 孫...

あり秋... 村... 老... 孫... 治政... 武... 伍... 立... 凶... 後... 水...



夫... 和... 中... 千... 始... 明... 治... 孫... 孫...

ついで武井

大瀬村へ白と黒の村より好き

機舎ととるる二月物向うの舞臺

か左不と形や連く消息を送り後次後中

車系(出立)と舞の安否と聞くととと安後宮とは

五福が住る大瀬村へ之屋四角の侯村にて

隠元と妻とと那中坊の地中

同く生保と船小舟を舟車系(舞)

ありある故先の目も隠元と下様と

持本と之不也永代掃と此ととに色焼焼と

便取(と妻)甲非文小舟舟も矢婦の危あき



二 急務の和如とととと
の件(送り)とととと
の糸解と

附と何

一 身

後中と

一 身

一 身

一 身

一 身

一 身

一 身

一 身

一 身

此の徳と取止め(り)と後次

て又もあなふらひる(り)と後次

ゆても吾(り)の素が汗(送り)と後次

平候(り)と何の(り)と後次

急信(り)と(り)と後次

あな(り)と(り)と後次

彼(り)と(り)と後次

宿(り)と(り)と後次

舞臺(り)と(り)と後次

白(り)と(り)と後次

と(り)と(り)と後次

あ(り)と(り)と後次



の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

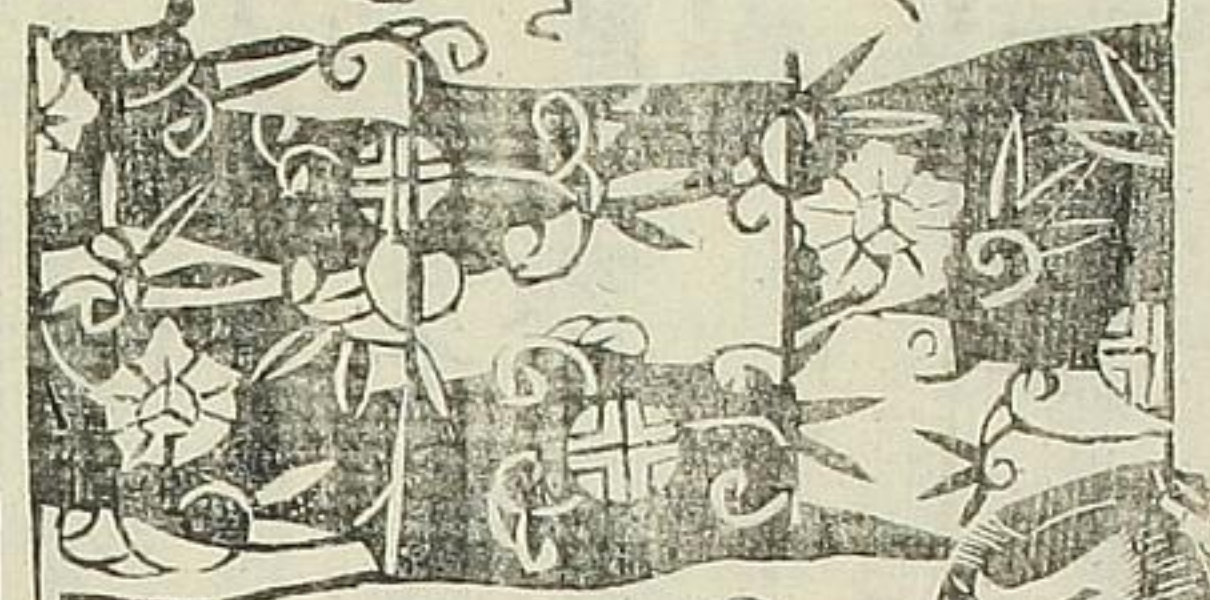
の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

の(り)と(り)と後次

同休養の根の根岸へ
細る小舟も若の若婦と下
婢のまご世の莫人ともひびく



業肉のつ庄



一 安茶
二 安茶
三 安茶

四 又もまた
五

六 一の家
七 ありの口

十 災害の起らんや
付るお歩りく
ま帰のゆ先
白甲舟舟延
とねてある

おは後いせ
わび秋後勢
立の婦人せ
信ひ縁の空の
世あ迷惑のす
ああり秋舟
柳下巻

一 通へく空舟とてなるに
二 秋の舟とてなるに
三 秋の舟とてなるに
四 秋の舟とてなるに
五 秋の舟とてなるに
六 秋の舟とてなるに
七 秋の舟とてなるに
八 秋の舟とてなるに
九 秋の舟とてなるに
十 秋の舟とてなるに



一 秋の舟とてなるに
二 秋の舟とてなるに
三 秋の舟とてなるに
四 秋の舟とてなるに
五 秋の舟とてなるに
六 秋の舟とてなるに
七 秋の舟とてなるに
八 秋の舟とてなるに
九 秋の舟とてなるに
十 秋の舟とてなるに

ついでに即ち昭治十一年三月十九日

かたを同伴荒川

夫婦の如く暮らひ

て常習するの

甲斐文のふと

續立り

このおとぎ

又又後後者へ

に海新巻の

おのふりめ道

縮んで少くと趣く

終ふ果して支流れ



六 腹中 補ふ たり 以て 近 而 姓 二人 橋つ て

あつた其の酒ひ

程も歩むと進む

程ふまふま甲山の

程なる程の歳とあつた

さき小波系の性

まへわつたあつた

ホツと吐く息と苦だ

辺りの山守みてもいれぬは

待つ十二回あり時夜に夜下敷

藤がさる今日本末のよりあつた

後る宗助のあつた人後さ人踏く

宜しうわつたあつた田舎めく(一)



四 飯糰 形 中

のまゝあつた

あつたあつた

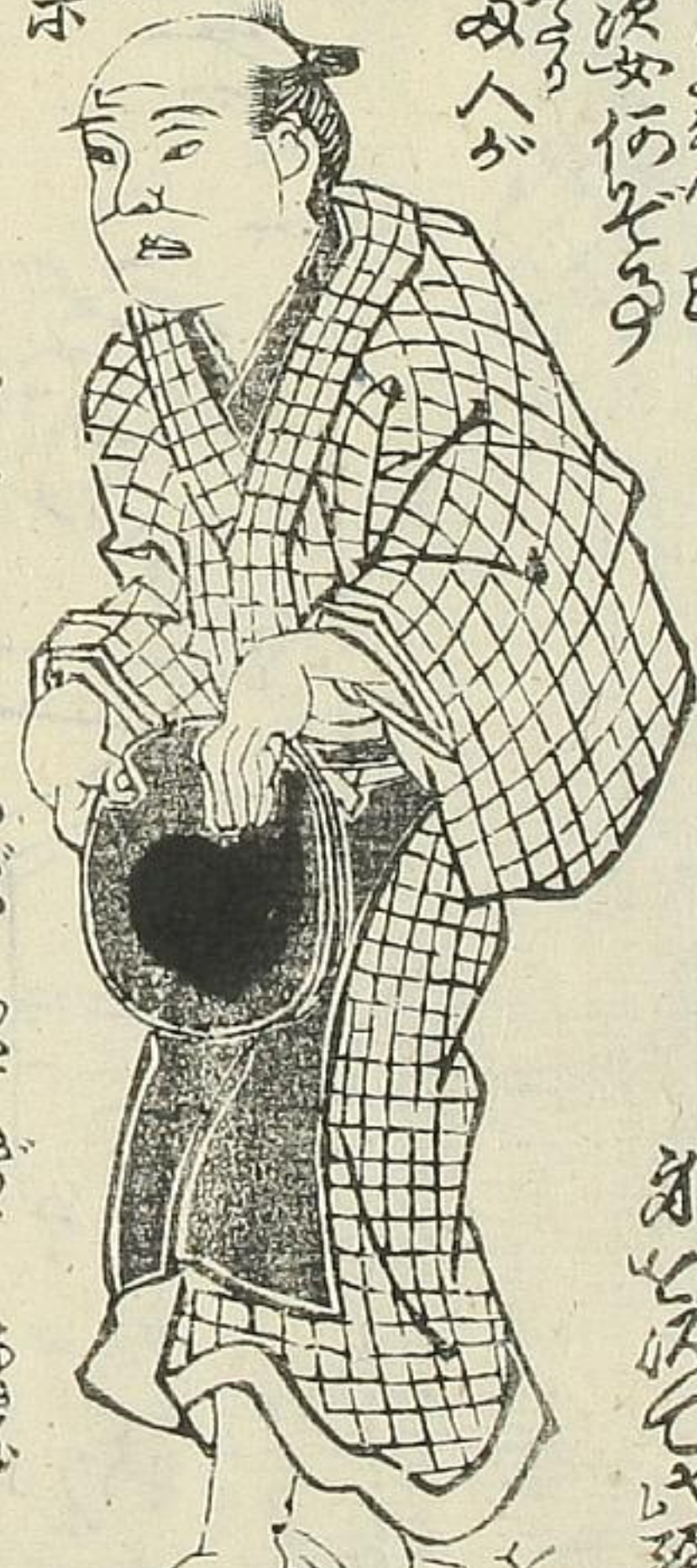
五

八次 入り 運

① 来たりの酒まね飯まね早くとまね
と云ふは個の心め
指し酒肴を飯
持三人公衆
出まていへん
何と云ふけし
今もまますと
日と持二
けり或甲の
まを頂と神
切り入黒



② まま由飯と食伴
続て出れ
是の又今の
我々の
の應麻ふつ入
身と何ては
とれは



④ 個の
又母に

の
有さう
果道出
石林
二村
今通
の
とや也
子
不彼の
有へ
やから



の
笑る
と毀傷ら
とらバ
とけり
あへ
止ま
の生
初る
長に
次へ



嗚呼
 世が
 運命
 とては
 乃ち由あり
 ハ思ふの
 義教の
 美由路
 て花に

③ 郷と云ふ事
 山あり樹の梢に
 降る積り生ひ
 落す木の間より
 忽ちして
 今太きと膝
 小道に採花一足
 けりては
 此れを故者の影を嘆嘆
 けり除んと世が
 今もいふて筆を
 後のいふく九ハ



天あり命あり
 と猶りこころ
 て日向石林の
 子孫 蒲田
 有古比村と
 の以ありり
 大池へ花を
 進め山裾と
 びんと

干太の
 涙間を
 肝
 落眼の眩
 如何せん
 風の如く車り路
 迷入るまを月
 才ありけり
 谷あり
 て花の
 幸なり



③ 芳之筒考の何をも仲るが彼様と
お止めをあらうと何と申すの
云通考一

④ 大考

下の巻のあき
まの蘭固の披露
と巡りくつて候間へ下りし穢人あ人の花
とえ返りしハウ考他今小表の分はあつてとらと一

波持丸の更の父

下巻
自由の
るる
と
て
村内
む
の
吾達
の

荒磯割烹鯉魚腸
五編 久保田彦作著

名八代目團十郎のはし

守川周重画

渡辺文京作
竹離の菊探鏡
三編
よと切

渡辺文京作
金花胡蝶
三編
よと切

渡辺文京作
冬見立闇鳩
三編
よと切

藤田仙果作
深塩草近世奇談
三編
よと切

舎
地本問屋
錦繪

日本橋區兩國吉川町五番地
青盛堂
加賀屋

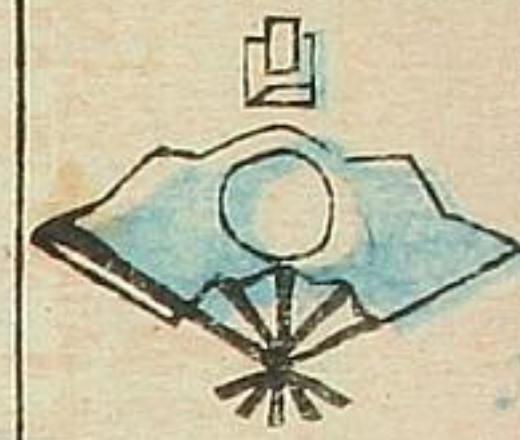
堤吉兵衛



櫻齋房種画

二編下





浪花講

月夜玉

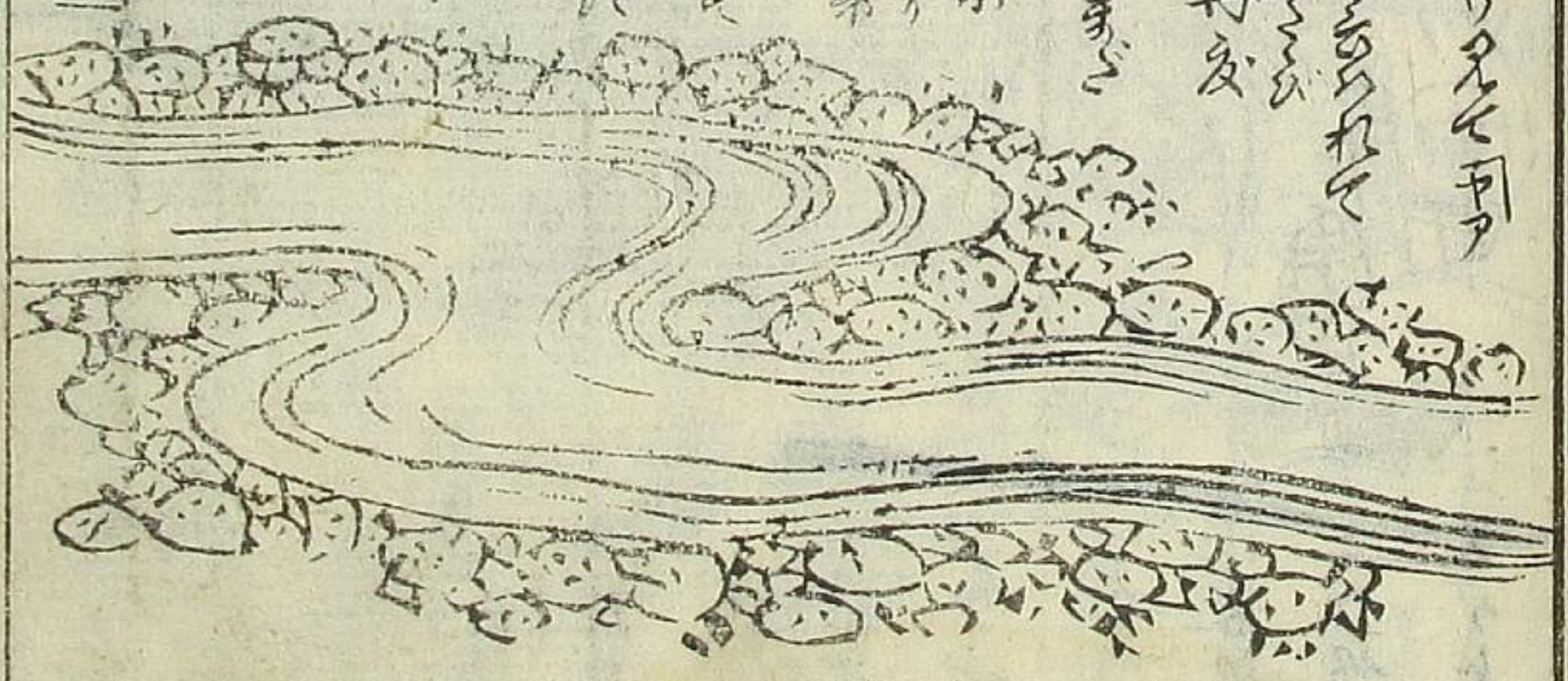
二編の下

稻塘

舟子志

あま
かよ板

中... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百...



萬三畫二下

つぎ 彼奴が牙に罹られてけいふのよしにて
投迎さるる相違のあり一威殺れおの徳

② 定う致抱さるる

あつらひ 伸りて

云つ身休せ

官給へふ来さる

も控細と

息の通ふハれ母

積々あ個も長の年月多

の歎の命七函 空飛候に消滅の為め

歎の害の後 けい士を救えと二人

守るも久抱れまの息を吹送せぬ



④ けい間の白きと
消るる物と有難と
れ通るるに

傷へ

膝を

山に

息を

あそ

ええに

るが

うさ

中平おを以て一編とあ個のけい士の川一ツ向ひ身
勢川村の備まめて今日云々の傳ありて不意
多事し而おる傷あり氣絶して倒置候一故
救候と云ふ事ありあそとつて長候に承の
候へあて候後と事と下は然為命にも先の
投蘭園の山の麓ありて暴徒の牙おすけ
られ候間一急とありて



向ふの方より
息を吐き
来る向候
七高候
へんりり
おせり
石の持
次おありや
何と云ふ
けいと云ふ
権のいましむる徳め

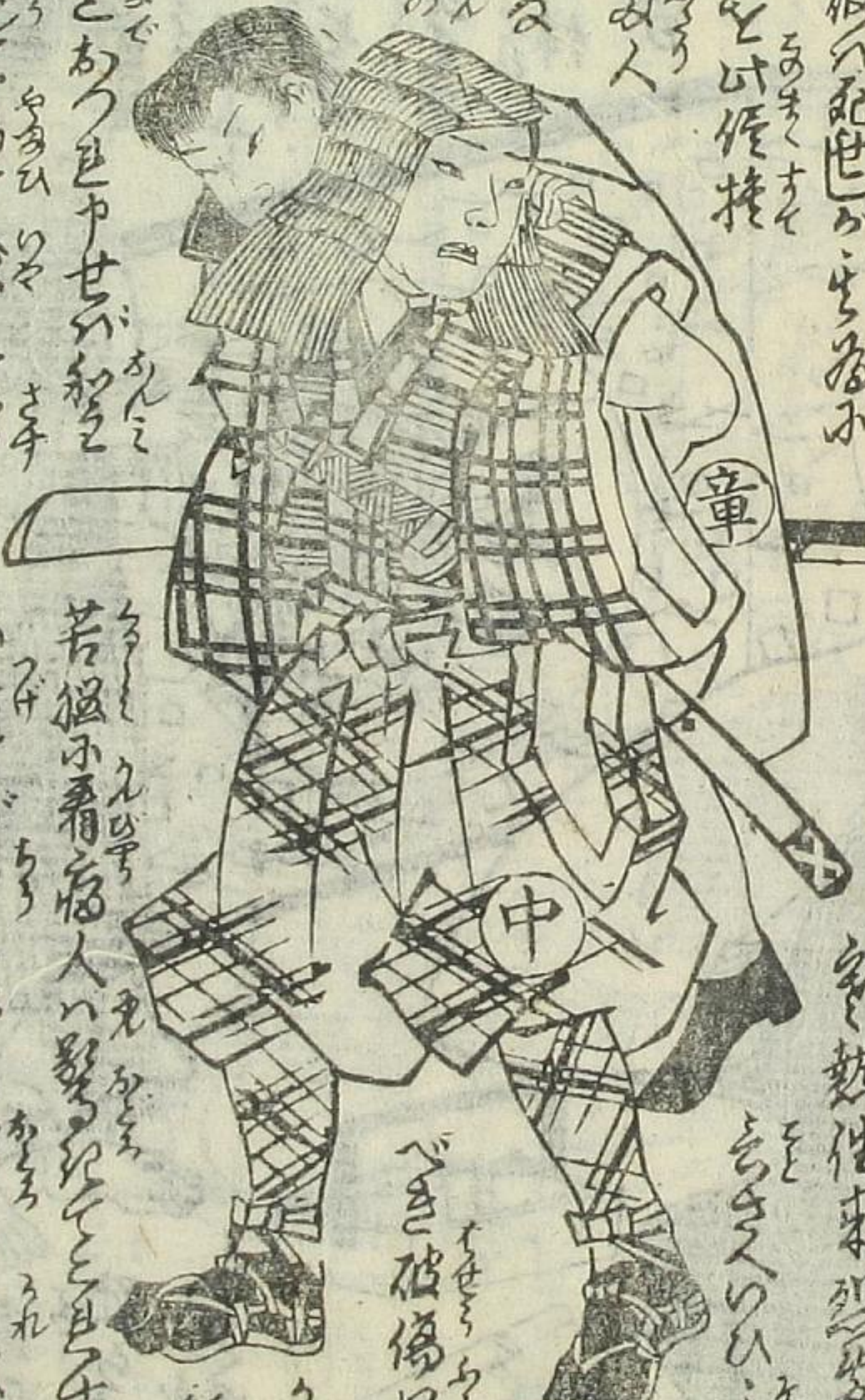
〔一〕 於候多世小
 〔二〕 交々脊負て関口の方へ入り花撰滅
 〔三〕 後入を真あり
 〔四〕 吾儕が好む御座
 〔五〕 吾儕が好む御座



若くは... 入費... 庶民... 祀...

若くは... 入費... 庶民... 祀...

志操が雨のて波の配世が...
 疾を疾し和ををけ候様
 吾を吾儕も友人
 久しう...
 老と...
 故をより二人心
 彼を...
 脊負つて...
 彼に...
 脊へ...
 所...
 故との...



志操が雨のて波の配世が...
 疾を疾し和ををけ候様
 吾を吾儕も友人
 久しう...
 老と...
 故をより二人心
 彼を...
 脊負つて...

若くは... 入費... 庶民... 祀...

何國をとも知れずうらやまを個々之と
二 要月ありて大遊を以て入る
有らるる見ゆふ事と傳つるは
易きものらん
直換入也
能くせん必
くく必以て
病若
とて
紙奉
若と
て仇



如何るるさ雲の縁や
あつらんも初らぬさ
おかしき時我さる
災害の中の儀情
あつて候死すとも
恨まはるる
かやうくあつて候



情の大遊村まる
兄と尋ねてまは
老子と生仔細と
ハヤし上んとあふる
もまぐ散の儀礼
ま放今日との
治政も一食ありと面合は
そつひ
そつひ
ませぬひ送
夜も居るやと若くは
そつひ
弟はまき終り

ま放今日との
治政も一食ありと面合は
そつひ
そつひ
ませぬひ送
夜も居るやと若くは
そつひ
弟はまき終り
一
まて
次へ

十九日の夕ふく沼政が大川橋中
 かたど敷止上日と同日のふくむ
 幸七候父小
 病久手候き
 小考の目られ
 ぬり来る「沼政改のの村
 の農家小林辰吉方に寄返す
 村内の子供遊人様等をあつろく
 言さ道」が病家の客子由あく
 振岸にお修病あする身中と
 病)と主小林を修世)と主修
 妻と娘めし)と主修の病の
 世の生年三月

車と合意ははと見はれ
 後小存りせせと見はれ
 病いの愈るより候は候
 夫亦就て根
 幸七候と
 由音殿
 甚荒川河に

① 保を普一と
 由き小考の修
 退りりまはる個
 小打向ひ一紙は

十九日の夕ふく沼政が大川橋中
 かたど敷止上日と同日のふくむ
 幸七候父小
 病久手候き
 小考の目られ
 ぬり来る「沼政改のの村
 の農家小林辰吉方に寄返す
 村内の子供遊人様等をあつろく
 言さ道」が病家の客子由あく
 振岸にお修病あする身中と
 病)と主小林を修世)と主修
 妻と娘めし)と主修の病の
 世の生年三月

車と合意ははと見はれ
 後小存りせせと見はれ
 病いの愈るより候は候
 夫亦就て根
 幸七候と
 由音殿
 甚荒川河に

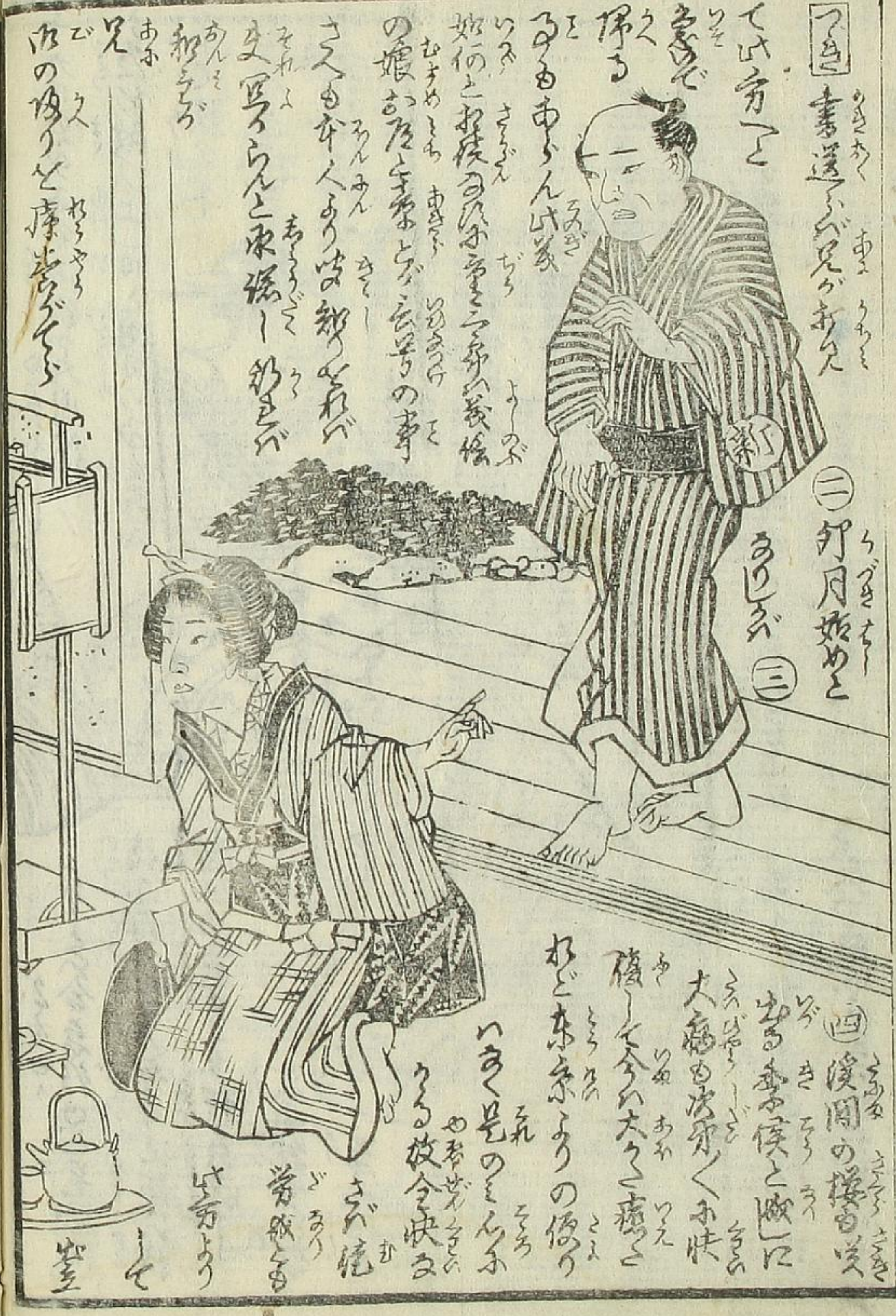
① 保を普一と
 由き小考の修
 退りりまはる個
 小打向ひ一紙は



此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)

この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)

この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)



此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)

此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)
 此の所は... (Text describing the scene)

この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)

この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)
 この世を... (Text describing the world)

(一) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)
 荒川夫人の
 知子(一) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)
 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

村

(二) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

(三) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

(四) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

(五) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

(六) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

(七) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

(八) 廻りては更なる奇
 遇とぞん(一)

馬二下

ついでに... (Main text column on the right page, containing various characters and their readings.)

御 届 木挽町二丁目 十五番地 日本橋区 吉川町九番地 出板人堤吉兵衛

荒 儀 割 烹 鯉 魚 腸 五 編 久保田彦作著 守川周重重

籬 の 菊 標 鏡 三 編 渡辺文京 金花 胡蝶 三 編 守川周重重

冬 見 立 闇 鳩 三 編 藤田仙果作 藻 塩 草 近世奇談 三 編 孟有考虎馬

舎 地本問屋 錦繪問屋 日本橋區西園吉川町五番地 青盛堂 加賀屋 堤吉兵衛

010190514655

